

1 目標（何を指すのか。）

【通年】

野鳥園の湿地を保全し、施設を有効活用した環境学習の場を提供し、大阪市と事業者が互いに理解・尊重して、対等な関係のもとに協働で事業を進めていく。

2 使命（どのような役割を担うのか。）

【通年】

- ① 多様な生きものが生息し、特に、様々な種の渡り鳥（長距離を渡るシギ・チドリ類を含む）が利用できる湿地を保全するために、モニタリングと順応的な管理を継続する。
- ② 大阪市内にあって大阪湾を望む景観（「住之江区の都市景観資源」として平成 24 年 12 月 21 日に登録）の中で、湿地を利用する渡り鳥や、それを支える干潟の様々な生きものの観察ができ、渡り鳥や干潟のことを学べる貴重な場を提供すること。

3 平成 27 年度 運営の基本的な考え方（方針）

(1) 渡り鳥を支える豊かな干潟がある野鳥園

多様な生きものが生息し、渡り鳥（生息環境が危機にあるシギ・チドリ類を含む）が多く飛来する豊かな干潟を含む湿地を保全するため、現状を生きものの視点から正確にモニタリング評価し、どのような順応的管理（手入れ）をすればいいのかを検討する。（→湿地再生プロジェクトチーム）

(2) 渡り鳥と人をつなぐ野鳥園

渡り鳥が多く飛来する野鳥園をより多くの市民に知ってもらうため、環境学習を企画実施し、渡り鳥の魅力やそれを支える貴重な自然環境（生態系）としての干潟の大切さを理解、共感してもらい、一度行ってみたい、また来たいと思われる市民利用施設とする。

- ① 野鳥ガイドの育成および新たな人材の発掘
- ② 市民参加型の環境学習プログラム
- ③ 広報活動の充実化

*1) 野鳥園内の干潟、塩性湿地、汽水池を含む環境を含めて湿地とする。

4 重点的に取り組む課題 — (1) 湿地の保全～渡り鳥を支える豊かな湿地がある野鳥園～

<p>将来像 (平成 31 年 3 月末時点)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. <u>シギ・チドリ類の種数</u> ^{*2)} <ul style="list-style-type: none"> ・春 (3～5 月) : シギ・チドリ類の渡来種数 22 種 ・秋 (8～10 月) : シギ・チドリ類の渡来種数 24 種 干潟の順応的管理により、シギ・チドリ類の中継地としての役割を将来にわたって果たしていく。 2. <u>シギ・チドリ類以外で湿地を利用する野鳥の種数</u> : 60 種 湿地で生活するシギ・チドリ類以外のカモ類、サギ類、その他の野鳥の生息環境を保全する。 3. 有機物が適度に堆積しやすく、シギ・チドリ類が好む多様な餌生物が生息している底質の状況。 <p>^{*2)} シギ・チドリ類の個体数は、東アジアの繁殖地・中継地・越冬地での減少が著しいため、個体数ではなく、種数の目標設定のみとした。</p>
<p>現状 (課題設定の 根拠となる現状)</p>	<p>日本国内の他の干潟と同様に、野鳥園に渡来するシギ・チドリ類の個体数は年々減少している。しかし、野鳥園は、湿地の保全と順応的管理を開園 (1983 年 9 月) 以後から継続して実施しており、生息環境が減少または悪化するシギ・チドリ類の大切な中継地となっている。</p>
<p>要因分析 (目指すべき将来像と現状に差が生じる要因)</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 繁殖地・中継地・越冬地での個体数減少や温暖化による生息環境の変化 2. 野鳥園の干潟の現状 ^{*3)} <ol style="list-style-type: none"> 1) 干潟表層の有機物堆積層の流出 2) カキ礁の拡大による干潟面積の減少 (北池) 3) 干潟の一部の砂質化 4) 干潟表層のバイオフィルムの減少 5) 地盤沈下による浅場面積の縮小と深場の拡大 (地盤は年間に平均 1 センチ低下) など 3. 干潟周囲林の高木化と高木への猛禽類の定着によって、湿地を利用する鳥類が昼間にじっくりと採食できない状況 <p>^{*3)} 5 項目の干潟環境の変化はあるが、湿地の生きものの現状は、貝類 69 種を含めて 203 種の多様な海岸生物 (絶滅危惧種は 34 種を含む) がバランスよく生息している。</p>
<p>課題 (上記要因を解消するために必要なこと)</p>	<p>有機物が堆積しやすく、シギ・チドリ類が好む多様な餌生物が生息し、安心して採食でき、満潮時に休み場がある環境づくり。</p>
<p>戦略</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 南池水門の両側を掘削し、南池から西池への流れをよくし、南池の干出面積を大きくする。掘削土砂は浅場創出に利用する。 2. 有機物を堆積しやすくすることによって小型シギ・チドリ類が好む餌場づくりをおこなう。 3. 満潮時の鳥類の休み場づくりをする。 4. 北池の浅場の砂質化を防ぐ長期的方策の検討 (カキ礁拡大防止も含めて)。 5. 干潟周囲の高木 (主にクロマツ) の剪定。

評価		中間評価 (評価日：平成 27 年 12 月 22 日)	年度評価 (評価日：平成 28 年 6 月 10 日)
	年度目標の 達成状況	<input type="checkbox"/> 達成見込 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね達成見込 <input type="checkbox"/> 未達成見込	<input type="checkbox"/> 達成 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね達成 <input type="checkbox"/> 未達成
	取り組み事項	1. シギ・チドリ類の渡来種数： 春（4～5月） 23種 秋（8～10月） 23種 湿地を利用するシギ・チドリ類以外の 鳥類種数：59種 2. 鳥の休み場づくり： 実施（平成 27 年 7 月作成）	1. シギ・チドリ類の渡来種数： 春（4～5月） 23種 秋（8～10月） 23種 平成 27 年度通年 全 32 種 湿地を利用するシギ・チドリ類以外 の鳥類種数：70 種 （添付資料 4 の学名で網掛けした種） 2. 鳥の休み場づくり： 追加実施（平成 28 年 3 月） 市民ボランティアの協力のもと、追 加で製作した。 3. 南池水門対策 平成 28 年 3 月に現場確認。平成 28 年 6 月に水門撤去予定。
	自己評価	1. 秋期は目標の 24 種には届かなかった が、2014 年度のシギ・チドリ類の全国 調査結果は、過去最低の渡来数であっ たことを考えると仕方ない状況。 （比較→2014 年度調査 春：22 種、秋：20 種） 2. 7 月に製作した鳥の休み場は、シギ・チ ドリ類を含め、多くの鳥類が利用し、 来園者にも人気であった。	1. 2014 年度のシギ・チドリ類全国調査結 果を上回ったものの、秋期は目標に届 かなかった。 2. シギ・チドリ以外の鳥類種数は目標を 達成した。 3. 市民ボランティアとともに湿地内で 作業を行うことによって、環境改善が できたとともに、環境学習の場として 有効であった。
	課題と改善策	1. 課題として残っているものは、南池水 門の問題や北池の一部砂質化、高木剪 定等の干潟や周辺環境の手入れであ る。詳細な対策については湿地再生プ ロジェクトチームで対応を検討してい きたい。	1. 平成 28 年 3 月に実施した湿地再生プ ロジェクトチームでの議論を踏まえ、 平成 28 年度は湿地への落ち葉の投入 について、大阪市立大学と協力して研 究を行うこととなった。今後の湿地の 環境改善に役立てたい。
委員評価	湿地の底質に関して状況を評価する基準を 策定することは非常に難しい。 水生生物の生息環境として維持することが のぞましい基準として設定された「水産用 水基準」というものがあり、そちらも今後は 参考としてほしい。	調査に関しては、内容が充実しており、評 価できる。 ただし、より調査の精度を高めるために、 関係機関の協力も得ながら、塩分濃度測定 など客観的なデータをとってほしい。	

重点的に取り組む課題 - (1) 湿地の保全～渡り鳥を支える豊かな湿地がある野鳥園～

具体的取組	計画				振り返り				
	点検項目	最終目標	現状(前年度までの実績)	平成27年度目標(当初)	中間実績	平成27年度目標見直し	年度実績	年度目標比較増△減	最終目標比較増△減
鳥類調査	鳥類調査実施回数	26回	10回	23回	16回	—	23回	0	△3
	大阪府一斉ガンカモ調査への情報提供	実施	実施	実施	2016年1月実施予定	—	1月実施	0	0
	環境省(モニタリングサイト1000)への情報提供	実施	実施	実施	実施	—	実施	0	0
	干潟再生PTで提示する資料整理(鳥類とくに、シギ・チドリ類の利用状況のモニタリング結果に基づく干潟環境の変化に関する報告書)	毎年データ更新	—	作成	済	—	済	0	0
底生生物調査	底生生物調査	2回	2回	2回	1回	—	2回	0	0
干潟現況調査	湿地再生プロジェクトチーム(PT)開催	2回	—	2回	1回	—	2回	0	0
漂着ゴミ回収と除去作業	実施回数	3回	1回	2回	2回	—	2回	0	△1
	ボランティア参加人数	400人	127人	300人	230人	—	230人	△70	△170
湿地の手入れ	ヨシ刈り、休み場づくり等の実施回数	5回	1回	3回	2回	—	5回	2	0
	上記手入れと環境学習との連動	5回	0回	1回	2016年3月実施予定	—	1回(3月市民ボランティアを募り実施)	0	△4

4 重点的に取り組む課題 — (2) 環境学習の実施～渡り鳥と人をつなぐ野鳥園～

計画	将来像 (平成31年 3月末時点)	<ol style="list-style-type: none"> 様々な体験型環境学習ができる場として、季節に応じたプログラムを実施する。 環境学習および野鳥ガイドは、土曜、日曜または祝日に実施する。
	現状 (課題設定の 根拠となる現状)	レンジャーが常駐していた以前の指定管理時のように、平日での環境学習の開催ができなくなり、年間の開催頻度が減っている。
	要因分析 (目指すべき将来像と現状に 差が生じる要因)	<ol style="list-style-type: none"> 環境学習を開催できる知識のある人材が固定化している。 予算の減少のため、環境学習に関して、対応可能な日数と人材登用数が限られ、実施回数が限られる。
	課題 (上記要因を解消するために 必要なこと)	<ol style="list-style-type: none"> 環境学習を開催できる人材の幅広い育成 必要経費の捻出
	戦略	<ol style="list-style-type: none"> 少ない回数でも内容の濃い体験型プログラムを実施する。 野鳥ガイドの育成を継続して行う。 現在の野鳥ガイドのスキルアップ研修を行い、種々のガイドに対応できる人材を育成する。 企業からの物的・金銭的支援を受け、企業や市民双方にとって有益で魅力あるイベントを開催する。

	中間評価 (評価日：平成 27 年 12 月 22 日)	年度評価 (評価日：平成 28 年 6 月 10 日)
年度目標の 達成状況	<input type="checkbox"/> 達成見込 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね達成見込 <input type="checkbox"/> 未達成見込	<input type="checkbox"/> 達成 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね達成 <input type="checkbox"/> 未達成
取り組み事項	<ol style="list-style-type: none"> 野鳥ガイド養成講座やその後の OJT 研修を終え、新たに野鳥ガイドとして登録した人数は 17 人となった。これにサポート役の野鳥ガイド 4 人を加えて、合計 21 人の野鳥ガイドが誕生。 環境学習の初参加者数が 40 人を超えた。 ヨコエビ定量調査などで、大阪市立築港中学校（大阪市港区）との連携をおこなった*4)。 アンケートの分析により有料催事のニーズについて調査した。 	<ol style="list-style-type: none"> 野鳥ガイドの数が格段に増加した。 通年の野鳥ガイド、探鳥会に加え、年間 7 回の環境学習を実施した中で環境学習の初参加者が 40 人を超えた。それぞれの環境学習の参加者は 10 名～20 名前後と多くはなかったものの、きめ細やかな対応を心掛けた。 ヨコエビ定量調査などで、大阪市立築港中学校（大阪市港区）との連携をおこなった*4)。 来場者に対するアンケートの分析により有料催事のニーズについて調査した。
自己評価	<ol style="list-style-type: none"> 野鳥ガイド登録者数は想定通りとなり、人材育成の第一歩となった。また、環境学習会の初参加者数も目標を上回り、今後の励みとなっている。 ヨコエビ定量調査などによって出来た築港中学校との連携を活かし、教員プログラムの整備にも繋げていきたい。 	<ol style="list-style-type: none"> 野鳥ガイドの増員が図られ、年間を通じ、四季折々の環境学習を実施できた。 ヨコエビ定量調査などにおける学校との連携については、引き続き継続し、学生を対象とした企画以外に教員を対象としたプログラムの整備にも取り組みたい。
課題と改善策	<ol style="list-style-type: none"> 有料催事については、現段階では実現にいたっていない。野鳥渡来数が減る冬期中に企業訪問を行い、次のイベントに繋げたい。 	<ol style="list-style-type: none"> 環境学習会参加者数は、定員に達しないことが多かったため、今後はより多くの方に参加いただけるように、広報や申込方法について改善を図りたい。 企業と共催で行う有料催事については、平成 27 年度中には実現に至らなかった。
委員評価	<p>有料催事の開催はできなかったものの、アンケート調査等有料催事ににつながる行動が評価できる。</p> <p>中学校との連携は非常にいいもので、教員とのつながりを持つことができれば、教員が転勤になったとしても、また新たな学校との連携が可能となる。これからもこのような取り組みを進めてほしい。</p>	<p>ヨコエビ定量調査のように学生を集めて調査したということは評価できる。</p> <p>引き続き、野鳥園を小学生や中学生の学習の場としても活用できればよい。</p> <p>アカテガニ観察会については、都市部ではなかなかできない貴重な体験ができるということをアピールし、積極的に実施して行ってほしい。</p>

*4) 築港中学校は海遊館連携授業の一環として、野鳥園での観察会や調査に参加した。第 67 回大阪市中学校生徒理科研究発表会（平成 27 年 9 月 20 日）では、野鳥園での干潟観察の活動内容を中心にした研究発表を行い、優良賞を獲得している。（詳細は築港中学校のホームページ（学校日記）を参照）

重点的に取り組む課題 - (2) 環境学習の実施～渡り鳥と人をつなぐ野鳥園～

具体的取組	計画				振り返り				
	点検項目	最終目標	現状(前年度までの実績)	平成27年度目標(当初)	中間実績	平成27年度目標見直し	年度実績	年度目標比較増△減	最終目標比較増△減
【定例】 野鳥ガイド	実施回数	40回	17回	36回	23回	—	36回	0	△4
	ガイド制服作成	実施。各ガイドに支給。	—	実施	済	—	済	0	0
【定例】 野鳥の会 定例探鳥会	実施回数	12回	5回	12回	8回	—	12回	0	0
野鳥ガイド	登録人数	40人	13人	20人	21人	—	21	1	△19
	一人で解説できる野鳥ガイドの数	12人	4人	6人	15人	—	15人	9	3
環境学習会	単発観察会実施回数	6回	1回	4回	4回	—	5回	1	△1
	今年度初参加者数	30人	—	15人	40人(シギチ観察、アカテガニ、ハクセンシオマネキ、ヨコエビ調査)	—	51人(シギチ観察、アカテガニ、ハクセンシオマネキ、ヨコエビ調査,カモ類)	36	21
有料催事	アウトドアメーカーへの訪問	—	—	1社	未	—	未	△1	—
	有料イベントの開催	3回	0回	1回	未	—	未	△1	△3
	企業からの協賛協力	3回	0回	1回	未	—	未	△1	△3
教員対象の環境学習プログラム	環境学習プログラムのカリキュラムを整備	教員対象プログラム年2回		作成	7月中学生対象プログラム実施(ヨコエビ調査)	学生向けプログラムの実施	7月中学生対象プログラム	0	△2

4 重点的に取り組む課題 — (3) 広報・啓発の取り組み～渡り鳥と人をつなぐ野鳥園～		
計 画	将来像 (平成31年 3月末時点)	<ol style="list-style-type: none"> 野鳥園自体の存在や環境学習を開催していることを市民に知ってもらう。 さまざまな環境学習の活用のあることを知ってもらう。 野鳥園を利用する渡り鳥の生態や魅力を市民が知ることで、自然環境への理解を深めてもらう。
	現状 (課題設定の 根拠となる現状)	<ol style="list-style-type: none"> 野鳥園の認知度が低い。(閉園したと思っている人もいる。) 府下では年間で最も多くの野鳥(150種)が見られること、特に湿地では年間90種近くの野鳥が利用していることに対する認知度が低い。 <p>※ 開園以後に野鳥園で記録された野鳥の種類：248種、その中で湿地を利用する種：140種(シギ・チドリ類：53種、カモ類：20種、サギ類：12種、それ以外：55種)</p>
	要因分析 (目指すべき将来像と現状に 差が生じる要因)	市民への広報不足。
	課題 (上記要因を解消するために 必要なこと)	渡り鳥の魅力とそれを支える野鳥園の存在を発信し、効果的な媒体を利用する。
	戦略	<ol style="list-style-type: none"> ホームページ以外の効果的な媒体による市民への情報発信。 野鳥園に足を運んできた人に、親しみやすい掲示物や案内板の製作。 ホワイトボードへの野鳥観察情報と写真の掲示。 アンケートを実施し、野鳥園に対する利用者の評価や効果的な広報媒体を分析する。

		中間評価 (評価日：平成 27 年 12 月 22 日)	年度評価 (評価日：平成 28 年 6 月 10 日)
評価	年度目標の達成状況	<input checked="" type="checkbox"/> 達成見込 <input type="checkbox"/> 概ね達成見込 <input type="checkbox"/> 未達成見込	<input type="checkbox"/> 達成 <input checked="" type="checkbox"/> 概ね達成 <input type="checkbox"/> 未達成
	取り組み事項	1. イベント用チラシ、ポスター、を作成し広報を行った。 2. 展望棟内に野鳥写真や野鳥解説シートを掲示した。 3. 利用者が野鳥の利用状況を書き込んでいるホワイトボードに野鳥の写真を掲載した。 4. アンケートを行い、利用者の考えを把握した。	1. 展望棟内の掲示を充実させた来園者の観察の手助けとなるように努めた。 2. イベントの開催に当たっては、チラシやポスターの作成などを行い、イベント参加者にはアンケートを行い、動向を把握した。環境学習会の申込方法等を工夫した。 3. 平成 28 年 2 月からホームページにブログを開設した。野鳥に関する話題や湿地環境に関する話題等様々な話題提供を行っている。コメント機能を付しており、利用者との相互コミュニケーションが期待できる。
	自己評価	1. 利用者に向け、野鳥園の魅力を伝える取り組みが出来た。アンケート結果については、分析結果を今後にしっかりと活かしたい。	1. 利用者が手軽に野鳥園やイベントに関する情報にアクセスできるように、情報提供の方法や学習会の申込方法を改善した。 2. 新たな情報発信手段としてブログを開始した。
	課題と改善策	1. ホームページを活用し、新規利用者、定期利用者にむけた情報発信を行う。 2. イベントでは、干潟内でのいきもの観察など貴重な体験ができることを評価していた意見が多かったため、そのような特長を前面に押し出したような広報をおこなう。 3. イベントチラシやポスターの掲載については効果的な配布、掲示方法について検討する。	1. 情報発信手段については、画一的になることがないように利用者の目線に立って柔軟に対応する。 2. ブログに関しては、コメント機能を活用し、利用者とのコミュニケーションツールとして活用する。
	委員評価	アンケートの実施により有益なさまざまな情報の収集ができた。今後、アンケートのまとめ作業については、港湾局だけではなく、関係者と一緒に行うとよい。ポスターやチラシは製作コストもかかるため、ホームページの充実や facebook などの web コンテンツの充実を図るのがよい。野鳥園にはリピーターが多いことを利用し、イベント参加者などを対象に「野鳥園会員制度」を導入してはどうか。	都市部でアカテガニが観察できるという珍しさを PR 材料とし、アカテガニ観察会やその他の観察会の PR につなげていってほしい。 野鳥園での活動に興味がある人、活動を応援したい人を対象に、「サポーター制度」を導入してはどうか。

重点的に取り組む課題 - (3) 広報・啓発の取り組み～渡り鳥と人をつなぐ野鳥園～ 点検表

具体的取組	計画				振り返り				
	点検項目	最終目標	現状(前年度までの実績)	平成27年度目標(当初)	中間実績	平成27年度目標見直し	年度実績	年度目標比較増△減	最終目標比較増△減
ホームページの充実	野鳥ガイド案内	実施	—	実施	実施	—	実施	0	0
	各イベント案内	実施	—	実施	実施	—	実施	0	0
区政だより、地元情報紙等の広報媒体にイベント情報掲載	地下鉄掲示板	2回	—	1回	1回	—	1回	0	△1
	大阪市HP	2回	—	1回	1月実施予定	—	1回	0	△1
	区役所にチラシ配備	実施	—	実施	実施	—	実施	0	0
	※9月に開催する観察会について多方面での広報活動を行った上で、来場者にアンケートを実施し、効果的な広報媒体について調査する。								
展望塔内の展示スペースの活用	更新回数	4回	—	2回	2回	—	2回	0	△2
	野鳥写真の掲示	2回	—	1回	2回	—	3回	2	1
	掲示板にイベントコーナー、お知らせコーナーの開設	実施	—	実施	実施(写真付き野鳥飛来状況)	—	実施	0	0
アンケートなどによる利用者ニーズの把握	常設アンケート	通年で実施	—	実施	実施	—	実施	0	0
	野鳥ガイド時のアンケート	通年で実施	—	実施	聞き取りにより実施	—	実施	0	0

4 重点的に取り組む課題 – (4) 各事業のトータルコーディネート～渡り鳥と人をつなぐ野鳥園～		
計画	将来像 (平成31年 3月末時点)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 専門的知識を有する人材が、各事業を包括して設計、管理、指示することによって、事業全体を通して野鳥園の機能と役割が発揮でき、湿地の保全ができるようにする。 2. どれかの事業に参加することにより、シギ・チドリ類を含む野鳥、湿地、生物多様性などについて実際に見て感じて理解できるようにトータルコーディネートする。
	現状 (課題設定の 根拠となる現状)	湿地環境の保全に関して市民参加できるプログラムがない。
	要因分析 (目指すべき将来像と現状に 差が生じる要因)	干潟再生プロジェクトで干潟の管理内容を決めただけで、市民が参加できる環境保全体験を組み込んだプログラムを実行に移す。
	課題 (上記要因を解消するために 必要なこと)	干潟再生プロジェクトの内容を検討する中で、市民参加で出来る作業内容を決める。
	戦略	<ol style="list-style-type: none"> 1. 環境保全のための体験プログラムと環境学習プログラムの充実。 2. トータルコーディネートに携わる人材の育成。 3. トータルコーディネートに携わる人材の他湿地との交流による活性化。

評価		中間評価 (評価日：平成 27 年 12 月 22 日)	年度評価 (評価日：平成 28 年 6 月 10 日)
	年度目標の達成状況	<input checked="" type="checkbox"/> 達成見込 <input type="checkbox"/> 概ね達成見込 <input type="checkbox"/> 未達成見込	<input checked="" type="checkbox"/> 達成 <input type="checkbox"/> 概ね達成 <input type="checkbox"/> 未達成
	取り組み事項	1. トータルコーディネイターの育成 2. 他湿地での運営管理者との交流、情報交換：大分中津干潟 3. 市民参加可能な干潟環境保全プログラムを実施。(平成 28 年 3 月実施予定)	1. 2 名 (30 代と 40 代) のトータルコーディネイターを育成し、環境調査や湿地の手入れに関する設計や企画を行った。 2. 大分県の中津干潟 (国内で 3 本の指に入るシギ・チドリ類の大規模渡来地) の地元 NPO や大学との年 3 回の交流 (シギ・チドリ類の調査協力、情報交換など) を通じ、人材の育成を図った。 3. 市民参加可能なプログラムとして平成 28 年 3 月に鳥の休み場づくりを実施した。
	自己評価	1. 今年度は新たに 2 人 (若年層) がトータルコーディネイターとして活躍し、専門的な知識に加え、事業の全体を見渡しなが、設計、管理、指示に携わった。	1. 今年度は新たに 2 人 (若年層) がトータルコーディネイターとして活躍し、事業運営を通じ、経験を積むことができた。また、他の干潟保全団体等との交流活動を行い、野鳥園の事業運営の参考とした。 2. 市民ボランティアを募り、鳥の休み場づくりを行った。湿地の保全と環境学習を合わせたプログラムを企画することができた。
	課題と改善策	1. トータルコーディネイターとしての幅広い視野を養うために、他の干潟環境保護に取り組んでいる団体と交流することは非常に重要であるため、今後も引き続き交流を続けていきたい。 2. 平成 28 年 3 月には、市民参加可能な干潟環境保全プログラムを初めて実施するため、今後につなげていきたい。	1. 新たなトータルコーディネイターの人材確保や育成に関しては、今後も引き続き取り組み、他団体との交流により、現トータルコーディネイターの知識向上にもつなげたい。 2. 湿地の保全と環境学習を合わせたプログラムに関してはこれからも充実を図りたい。
委員評価	トータルコーディネイターをはじめ、事業に関わる人材について、特に若い世代の獲得が重要である。引き続き若い世代の確保に努めてほしい。	南港ウェットランドグループと大阪市との間でしっかりと情報共有を図り、事業を進めていってほしい。 トータルコーディネイターが 4 名いるが、そのうち 1 名を広報担当専門としてはどうか。	

重点的に取り組む課題 - (4) 各事業のトータルコーディネイト～渡り鳥と人をつなぐ野鳥園～ 点検表

具体的取組	計画				振り返り				
	点検項目	最終目標	現状(前年度までの実績)	平成27年度目標(当初)	中間実績	平成27年度目標見直し	年度実績	年度目標比較増△減	最終目標比較増△減
人材育成	トータルコーディネイトにかかわる職員の人材育成(OJT)	5人	2人	4人	4人	—	4人	0	△1
他湿地の運営・管理者との交流	環境学習や干潟・湿地の管理手法に関する情報交換	2回	—	1回	2回 (大分中津干潟や博多湾の干潟の保全活動団体との交流)	—	3回	2	1
市民が参加できる環境保全体験	市民が参加できる環境保全体験を組み込んだプログラムの実施	2回	—	0回	底生生物調査と連動(2016年3月予定)	1回	1回	0	△1